

1 開会

2 全体協議（石井コーディネーター）前半

（石井コーディネーター）

今回は全4回の折り返し地点になる。前回に引き続き少子化時代の子供たちの望む中学校のあり方について、中学校の生活を中心に、どのように中学校の環境を整えていきたいかということ、自由に議論していただく時間になる。今回はナビゲーターとして、足立区元教育長の定野司さんにお越しいただいている。定野さんの経験の話を聞きながら、その刺激を受けて皆さんにいろいろアイデアを出していただきたい。これまでの議論を取りまとめた結果をお配りしているが、こちらは参考程度に見ていただければよくて、行政だけでなく地域や個人でできることを、どんなに小さいことでもアイデアをたくさん出していただきたい。

まずは前回欠席の方の自己紹介をお願いしたい。自己紹介の内容は前回と同じく名前、お住まいの地域、南陽市歴、どんな人か（職業や趣味など）、テーマについての一言、参加動機。

～自己紹介～

（石井コーディネーター）

早速中身に入っていきたい。前回の最後にメリットとデメリットをはっきりさせたほうが良いという意見があったので、そこに触れてもらいながら定野さんに話をしていただきたい。定野さんは、教育長をされた後、不登校特例校の校長をされている。教育長の経験と今の仕事の経験を踏まえて話をしていただく。

（定野ナビゲーター）

※関連ファイル「③ 02 小中学校の適正配置計画(ナビゲーター説明資料)」参照

私が勤めている東京みらい中学校は、私立中学校だが、足立区立の公立小学校の跡地を活用している。民間の学校が建物を作っていて、中学校と通信制の高校が入っている。自分は42年間東京都足立区で公務員をしており、最後の6年間教育長をしていた。足立区では、平成7年に小中学校の適正規模適正配置建築計画を作っている。適正な規模、適正な配置、施設の改築という3点が、学校をどうして行くかという時にとても大切で、これらのポイントは全て子供のためということが中心にある。適正配置計画には、豊かな心や体を育む場所、毎日明るく通える環境をつくってほしいということが書かれているとともに、学校が地域の人たちのものでもある事であることから、しっかりと地域住民と協議しながら常に見直しを図ってほしいということも書かれている。ここでの議論も同じで、常に時代とともに学校の在り方は変わっていくものと考えている。適正配置計画の策定では、人口減少地域への対応を念頭に、最初に5か年計画を作り、その後適正規模適正配置についてのガイドラインの作成、各学校地域学校の実施計画をつくるという段階を踏んでいた。その後、統合地域協議会を立ち上げ、8年毎の計画見直しを行ってきた。適正規模適正規模の基準についても、地域の面積や人口、地形によって変わってくるが、足立区の場合は、適正規模が小学校と中学校で12から24学級、1学年1学級にならない構造を目指すこととした。過小規模校をなくすことを適

正規規模とした。配置の距離で言うと、小学校は800m、中学校は1,200mを基準としている。過小規模校をなくすために学校統合をしようという時に統合協議会を作って決定するという事を計画策定から続けてきた。小規模校のデメリットとしては、1学年に1学級だと人間関係が固定されてしまうということがある。また、指導面でも学級間の刺激が少なくなってしまうたり、教員の指導が行き届きすぎて、生徒の自主性や成長に影響を及ぼすことも考えられる。これは、子供たちがコミュニケーション力を学ぶクラブ活動や運動会、文化祭等の授業外のことに影響を及ぼす。例えば文化祭で模擬店をやって、大人たちや地域の方々に商品を買ったりする経験をして社会通念やコミュニケーションを学ぶ。運動会や合唱コンクールも、競技活動として非常に重要だが、小規模だとなかなかこれができない。運営面でも、子供の数が減り、先生が減ることで、専門でない先生が他の教科を担当したり、常勤の先生が減り、非常勤の先生が多くなって、他の業務で負担が重くなったりする。子どもたちも、先生が忙しそうだと相談がしにくくなり、トラブルの元になることもある。小規模校にはこういったデメリットだけでなく、メリットがあると中央教育審議会が公式文書で出している。小規模校では、児童1人1人に目が届きやすいとされているが、子供の数が減るとともに、先生の数も減っている。学校行事や部活動で生徒1人1人の活動機会を設定しやすいとあるが、例えば文化祭の劇で、人数が居ないと脇役や裏方の必要性を知ることができない。このように、メリットとされていることが本当にメリットかを考える必要がある。人間関係が深まりやすい、学年間の交流が生まれやすいということもメリットとして挙げられているが、標準の学校でもこういった意図をもって対応するかによると思う。その他、教員間の意思疎通がしやすいというものもあるが、いずれも小規模校に限ったメリットではないかなと思う。子供達が複数の場所で活動をしていると小さな学校だと、教員の数で足りず目が行き届かないということがある。学校は大きすぎても困るし、小さすぎても困るという認識でいる。では、過小規模校があるので、統合しようとなった時には、統合準備協議会を設置し、教育委員会だけでなく地域の方にも入ってもらって協議をする。実際に小学校の統合を行った例を見ると、協議を始めてから4年から4年半掛かっている。この期間に卒業する子供もいるので、早く始めることが重要だと考えている。また、同時に廃校になった場所をどうするかという話が出てくるが、ここに無理やり何かを作る必要はないと考えている。お金や維持費がかかってしまうので、必要なものなら作るべきと思う。図書館を作ったり、上層階に都民住宅を作ったりしている。その他、特別養護老人ホームを作ったり、大学の誘致をしたりしている。高齢化が進み人口が減少していた地域に大学ができてからは、学生が通うようになり、若者向けの施設もでき人通りが増え、地域の活性化に繋がった。学校の複合化の例でいうと、温水プールを地域住民にも開放したという事例がある。また、コロナを機に40人学級が35人学級になったり、学力に合わせてクラス分けして授業をするための教室があったり、武道場、特別支援学級の教室、ユニバーサルデザインとしてエレベーターができたりと学校は大きくなる要素がたくさんある。先生で対応することが難しい相談ができる専門家のスクールソーシャルワーカーのカウンセリングルームを設置したりもしている。放課後子供教室、災害備蓄倉庫など時代に合わせて必要なものも変わってきている。しかし、現在は学校を大きくする必要があっても、人口減少が進み将来不要になる教室が出てくるのが想定される。そういったことに対応するため、東京みらい中学校は最初から別の施設に転用することができるような作りになっている。人口減少で自治体の歳入が減ることで、施設の維持が難しくなってくる局面で、学校にビルドインすることで、全体面積を減らすことができる。茨城県の行方市では、廃校に合わせて通学困難な児童生徒のためにスクールバスを用意するのに約3億円掛かっている。やはり何をするにも人とお金がかかるということを考えていく必要がある。今まで話したことをまとめると以下ようになる。

・児童生徒数の減少に合わせて、子供の学習環境を整えるため、適正規模化、適正配置化を進める。

- ・合わせて老朽化施設をした施設の改修、改築を行う。
- ・適正規模、適正配置の基準を示す
- ・他の公共施設との複合化
- ・学校跡地の活用

公立学校では、今まで一律の基準で作られることが求められてきたため、対応が難しかったが、不登校特例校から名前が変わった「学びの多様化学校」が来年には近隣の上山市にができると聞いている。こうした中で、自分は学校らしくない学校を作るのに腐心している。校則が無かったり、プールの授業が無かったりといった従来のでない学校で、夏休みの宿題もなくしている。宿題がなかったら意欲のある子どもは自分でやり方を聞いてきて、材料を与えたら自分で勉強する。これが新しい形の学校でできることなんじゃないかと思っている。

(石井コーディネーター)

質問や思ったことがあれば発言いただきたい。

(委員自由発言)

適正規模の学校のメリット、デメリットを詳しく説明していただきたい。また、適正規模の学校づくりの結果、どういった子供が育ったかを教えて欲しい。

(定野ナビゲーター)

まず、単学級ではクラス替えができず、人間関係が固定化されてしまう。これが一番大きい要素だと思う。そのため、過小規模校を解消し、クラスを2つ以上にしたいというのが一番のポイント。どういった子供が育ったかについては、数値化して出せる部分はあまりないが、対人関係能力が高くなったという風に個人的には思っている。10年前にそういったことに係る調査を始めているので、これを分析すれば答えが出てくるかもしれない。子供たちが地域活動に参加することでレジリエンスが高まるというエビデンスもあるので、学校での繋がりについてもこれを引用できると思う。レジリエンスとは逆境に立ち向かう力という意味。

(同上委員自由発言)

小規模校の生徒が逆境に弱いのかと考えるとそうではないと思う。色んな所で見ている限りでは、かえって心が豊かに育ったんじゃないかという気がしている。適正規模の、そこそこ人がいる学校で育った子が心豊かに育つかというとそうではない気がする。コミュニケーションを取れるかは別にして、心の豊かさは欲しいと思う。その点に関しては、適正規模かどうかという話ではないと思う。

(定野ナビゲーター)

その点は賛成で、学校の大きい小さいに関わらず必要なことだと思う。

(委員自由発言)

教育の基本的な理念について教えて欲しい、

(定野ナビゲーター)

今の学校では、子供達の好奇心を大事にして、チャレンジさせる。失敗してもまたやろうという風に心が動く、感動することを是としている。教育長の時は、楽しい学校、「楽校」という字に変えて、成長が実感できる学校というのが理念だった。子供達が成長を実感できれば、さらに成長を実感できると考えている。勉強しろというと子供たちは余計に勉強をしなくなる。自分が勉強したくなるように仕向ける必要がある。教師がいなくても学ぶというのが理想の姿だと思う。

(委員自由発言)

私が通っていた学校は1クラス43から44人で学年10クラスの中学校に通っていた。全体で大体1,300人の生徒がいたが、名前も顔も分からない人が6割くらいだった。人口密度が高くてとても息苦しかったことを覚えていて、今中学校に戻ってももう1回入学したいとは思えない。しかし、全校生徒20人くらいの学校に入りたいと言われるとそれもちょっと辛い。大規模校では、運動が苦手でも、周りでたくさんの方がいるので、同じような子もたくさんいるので記憶に残らず悲観することもなかった。大規模マンモス校の出身の割にはのんびりしていると言われるので、どの学校で育ったからこう育ったとかいうことはあまりないと思う。自分も息子もあんまり小さい学校に通わせるのは嫌だと思っている。今の話を聞いて適正規模というのもあるのかなと思った。学校の規模で子どもの育ち方が変わるというよりも、どうい学校にしていくかということが大事なのかなと思った。

(委員自由発言)

先ほどの説明を聞いていると、図面の中で適正かどうかを判断しているように見える。図面の中で適正と言っているけど、子供たちは、全く違う世界に出て行くことになる。適正の中で育てられた子供たちは全く違う世界に出て行くので、そこに耐えうる力があるかは絵に描いた餅だと思う。適正というのは曖昧な表現だと思った。

(定野ナビゲーター)

適正という言葉は、少子化に伴い学校を減らすという計画ではないという意味で適正という言葉を使ったのだと思う。ここでいう適正は規模感の話なのでハード面が強調されて伝わってしまったと思う。ポイントは子供たちにとってどうなのかということで、少人数で部活動ができないという時に学校の規模をどうするかということのほかにも、地域のスポーツクラブを活用したりする方法を組み合わせさせてやっている。

(委員自由発言)

適正ということが時代によって変わるという話があったが、みんなで検討して数字を設定して8年毎に見直しをかけるというのはいいことだと思った。

(石井コーディネーター)

適正というのは難しいと思って聞いていた。どういうところで過ごしたから適正な育ち方をしないということでもない。何にとって適正なのかと考えると、中学校3年間とか9教科とか今の決まった中学校の制度の中で、上手くやるための適正だと思う。

(定野ナビゲーター)

学びの多様化をもっと進めるべきだと思う。中学校の年間授業数は1,015時間と決まっているが、自分の学校では770時間に縮減して、その分をソーシャルスキルトレーニングというコミュニケーションを図るような色々な行事とか専門家や先輩を呼んで話を聞くという余裕ができた。文科省が授業の時数や先生の数を決めていて、そこで決められた適正という範囲はそこまでかなと思っていて、これからだんだんと多様化が進むと思う。そういった学校をどんどん増やしていきたい。

(委員自由発言)

夏休みに宿題がないという話があったが、やる気がある人は自主的にやると思うが、そうでない人はやらないで、墮落してしまうと思うがどうか。

(定野ナビゲーター)

宿題をやらなかったから墮落してしまうかということと必ずしもそうではないと思う。いつ気づくかということが問題だと思う。受験目前に高校に行きたいと思って、今までの分をとりかえたいと思って相談する。普通の学校ではそう思うまで待てないから宿題を出す、自分の学校では少し待つことが出来る。ある程度のところまでやるという基準はあるが、それは本当の教育ではなく、待つということが本当の教育である。中間テストだったり授業数といった制約をどれだけ解除できるかだと思う。あなたの中学校時代はどうだったか。

(同上委員自由発言)

社会人になってからもっと色々しておけばよかったと思った。

(定野ナビゲーター)

専門学校の学生もそういうふうにする。それを子供たちに伝えてあげて欲しい。

(石井コーディネーター)

前回、小さい学校だと教科外を教える必要が出てくるという話が複数の委員からあった。最近の学校はスクールソーシャルワーカーだとか英語のネイティブの先生がいたりだとか、今までなかった機能が増えてきた。今後、こう言った形で、1人の先生が複数の役割を持つのではなく、役割の細分化、専門化が進んでいくと、大きな学校ならそういう先生が毎日来てくれたりするのにも、小さい学校はあんまり来ないという風になる可能性もある。その辺りはどうか。

(定野ナビゲーター)

公立の学校はスクールカウンセラーは週2回だったが、今の学校は常駐している。常駐の良さは、教員と連携がとりやすい、授業に入り込めるという点がある。そのためには、教師の全体数が必要である。ある程度の規模の学校では、こういったことも可能になる。

(学校教育課長)

南陽市では、スクールカウンセラーが中学校に2人ずつ配置している。中学校の生徒、保護者との面談や要請に応じて小学校に行っている。スクールソーシャルワーカーは3人いる。教育委員会に席があり、要請や

必要に応じて、福祉や医療とのつながりを務めている。その他、教員でない学習支援をする人を18人雇い配置している。ALT も市内に3人いる。教育内容にムラが出ないように、同じ ALT から学べるようにしている。曜日によって違う学校を回っている。

(休憩10分)

(石井コーディネーター)

後半を再開する。後半は、前半の足立区の話聞いて、自分の経験も踏まえて南陽市の中学生の子供にどう育てほしい、南陽市の中学校がこういう場であって欲しいという話をしたい。こうなって欲しいでも、ここは維持してほしいというところがあれば話してほしい。

(委員自由発言)

個人的に中学校よりも高校の時の方が楽しかった。自分の子供たちもそのように見える。これは、自分で選んで入った学校だからではないか。山形県では、中学校は基本的に自分で選ばず、決まったところに行く人が多いので、そこでどう過ごすのが大切だと思った。そのために周りの大人が何ができるか。先ほどもあったが、若い方がいらっしゃるので、中学校は楽しかったという話を聞きたい。

(委員自由発言)

高校と比べて中学校は制限が多かったが、多感な時期でとても大事な時期だった。友達と遊んだり、部活をしたり、不自由な中の自由が楽しかった。不自由の中で自由を見つけていいことも悪いこともするのが楽しかった。

(石井コーディネーター)

中学校の先輩の立場で、何をしてあげられるか。何を残していけるか。

(委員自由発言)

スマホから、SNS 等で情報を得られることが多すぎて、そこからいじめになったりすることが可哀そうだと思う。

(委員自由発言)

中学校よりも、今の高校の方が楽しいと思っているが、体育大会の応援が楽しかった。色々悪いことをして怒られたこともあったが、友達同士で遊んだのが楽しかった。

(定野ナビゲーター)

そういった達成感是谁かに与えられるものではなく、自分で見つけるものだと思う。自分で見つけられる機会、環境を与えられるか。勉強も運動会も、好きじゃない子にも達成感を得るために順位を決めないといった形をとる場合もある。

(石井コーディネーター)

授業だったり学校の行事だったり部活だったり、達成感に気づくことはあったか。

(委員自由発言)

自分が子供の頃は休み時間や放課後に山に遊びに行き、栗を食べたりしていた。コシアブラと漆の違いを実体験で知っていた。今は職業自給率が低かったりして、今後食糧危機が来た時のために、何が食べられて何が食べられないかということを学ぶ必要があるかなと思う。

(石井コーディネーター)

滋賀県大津市では、中学校1年生に淡水魚のつかみ取りをさせて、調理させて食べさせていることを思い出した。そんな風に南陽市に生まれたからにはこれはできないというものはあるか。

(学校教育課長)

荻小学校では、学校行事にワラビ取りがあって、子供たちはワラビを見るとおいしそうという。赤湯小学校では、PTAの方が交渉して、温泉の無料券を出して、親子でお風呂ということをやったことがある。荻小学校が統合した宮内小学校でも、ワラビ取りを始めた。

(石井コーディネーター)

そういったところから、こういう中学生だとかこういう中学校であって欲しいという事が考えやすいと思う。

(定野ナビゲーター)

足立区では、中学校を卒業するまでに自分でご飯の用意ができるようになるというのを食育のテーマにしている。

(石井コーディネーター)

さっきの話から、学校よりも地域の方でできることということもあると思う。

(委員自由発言)

自分ごと化会議に参加したことをきっかけに、中学生を気に掛けるようになったが、最近の中学生はカップルで登校する人が多い。自分達の頃に比べて最近では精神も肉体も大人になっているんだなと思った。中学生の時から、将来生きていくのに必要な人を思いやる心とかをもっと教育していかないと間に合わなくなっているように思う。最近では、男性も産休を取る時代で、そういったことを家庭外でも教えていく必要がある。自分の興味があることをやらせてあげる必要がある。多感な時期に将来本当に役に立つ自立して家族を守っていけるようなことを、自分で、自分以外の一般の方でも教えてあげられる世の中にしたい。相手の性を大事にできる孫になって欲しいと思っている。

(石井コーディネーター)

中学校から、子供をだっこするという体験をしている学校もある。多様な体験だったり生活力も大切。

(定野ナビゲーター)

妊婦を体験できるセットも最近はある。

(委員自由発言)

過去、同級会を開いたとき、とても遠くから来てくれた同級生がいた。しかし、見た時に誰だか分からなかった、思い出せなかった。中学生時代にはおそらく視野に入ってなかった。その時、直接だれか聞いてしまい同級生を傷つけてしまった。中学校の頃にそういった見えない人がいたことにショックを受けた。

(委員自由発言)

定野ナビゲーターが言っていた好奇心や心が動くチャレンジを大切にしていると言っていたことが心に残っている。そういったことが今まで家庭の中で学べていたと思うが、最近はできていないのかなと思う。これからは学校行事の中で学ぶという話がとても心に残った。

(委員自由発言)

それができる人とできない人がいるので、それを法律や制度の形だけでなく、そういったところに目が届くか、皆でしゃべる場所があればあったらいいと思う。

(委員自由発言)

ゆとり教育世代が今は脱ゆとり世代に切り替わっている。脱ゆとりはやりたいことはやりましょうという教育になっていると聞いた。しかし、脱ゆとり世代は何をしているかが良く分からない。近年は若者の自殺率が上がっている。これまでの教育と何が違うのか見えないと思っている。

(石井コーディネーター)

ここ30年ほどで学校が何を大事にしていたかということか。

(学校教育課長)

それらは報道で使われている用語で、教育委員会としては意識していない。しかし、日々求められる学力は変わってきている。これからの AI や ICT 機器の活用やビッグデータ等を活用してグローバル化、少子高齢化等の課題を抱える世の中を生きていくうえで、必要なものは知識の量だけでなく、それをどうつなげていくかだ。つなげたものでどう価値を作るかという力を育てていく必要がある。南陽市としては、高い志を持って自律的に生きられるような児童生徒を育てたいと考えている。今回参加している高校生が大人の前で堂々と発言しているのをみて、よく育っているのかなと思っている。

(石井コーディネーター)

歴史を詰め込む知識偏重の時代から、もう少し話し合う方向に変わってきて、こうした場で対話をする場で話せるような風になっている。一方で兄弟の数や地域の子供の数が減ってきて、異年齢の付き合いや話したり遊んだりが減り、コミュニケーション能力の低下がある。そういったことが、ゆとりと言われたり、脱ゆとりと呼ばれたりしているのかと思う。

(定野ナビゲーター)

学校が変わってきていると感じている。学校の最終的なゴールが卒業や高校進学でなく、生き抜くということに変わってきている。知識でなく、単純なティーチングでなく、車座になってファシリテートができるようになっていたりする授業が増えている。

(同上自由意見)

若者に自ら命を絶ってほしくない。若者がいなくなれば少子化が進むだけ。思いやりがあるということは心が強いということと思う。

(定野ナビゲーター)

誰も褒めてくれる人がいない時に、自分で自分を褒める訓練をすることを子供たちに言っている。これは自殺対策にもつながる。もちろん、気づいたら人に言ってあげることが一番。

(委員自由発言)

最近、「北の国から」というドラマをみた。その中で、お母さんが亡くなって葬式に出るため東京に行くシーンがあった。田舎暮らしに嫌気がさしていた子供たちが久しぶりに東京に行ったときに、もったいないという気持ちや自分で水道や電気を引くことの大事さに気づいたというシーンを見て、なるほどと思った。それをこの会議の内容に置き換えた時に、自分の地元で誇りや愛情を持つことが軸であれば、自ずと他のこともよく回るんじゃないかと思った。地方と都会の同世代の人が、お互いに自分の故郷のことをアピールし合えるようになることが、何より大切で、地元離れの対策になるかもしれない。都市では分からないもののありがたさを、地方で地域やおじいちゃんおばあちゃんが教えてくれることが多くあると思ったので、地元愛を育て、地元の個性が分かることができる人になれるような進み方が出来ればと思った。

(委員自由発言)

自己紹介で、自分はこんなことが学べる学校だったんだとか、こんないいところがあったと言える学校が良いと思う。

(石井コーディネーター)

ビジョンが見えた気がする。やはり高校よりは中学校の方が地元ということか。

(委員自由発言)

高校は、好きな所に進むが、中学校は生まれたところに進む人が多いので、やはり中学校かなと思った。

(石井コーディネーター)

選べない中学校を、どう肯定的にするかということだと思う。中学校三年生の時に地元を知って誇りを持つ素養を育むということ。

(学校教育課長)

過去に、議会で、故郷に残る教育をすべきなのではと質問があった。教育委員会としては、地元に残る教育

をするわけではなく、都会でも地元でもそれぞれの活躍できる場所で、できればと考えている。ただその時に、地元のことをどこかで気にかけて、思い返せるような教育活動をしている。

(石井コーディネーター)

地元で誇りを持って活躍できるという事は、働く場所がどこでも中学校のいいところを自慢できるような人になるということ。

(定野ナビゲーター)

中学校同士の交流はあるのか。

(学校教育課長)

近隣の部活動や合唱で切磋琢磨する機会を設けている。

(定野ナビゲーター)

都会の学校というものはあるか。

(学校教育課長)

今はないが、オンラインでやったりする可能性はあると思う。

(定野ナビゲーター)

足立区にも昔は田んぼや畑があったが、なくなってしまって、子供たちが米と言ったらスーパーで売っているようなパックを想像するようになった。そうした子供たちを連れて新潟県の子供たちと交流をして、農業体験をしたり、自分たちで調理をしたりしていた。こういったことがヒントになるかもしれない。

(石井コーディネーター)

以前行った中学生が10数名しかない新庄村で、「新庄学」というカリキュラムを実施していた。中学生が村のことを学び改善策を考えて議員の前で発表するという内容だった。

(委員自由発言)

吉野地区出身だが、前半の資料の小規模校のメリットが少ないことにすごくショックを受けた。小規模校の自分の出身校にすごく誇りは持っている。しかし、適正規模には賛成している。自分自身、部活動が選べなかったりして、もっと選択肢が欲しかった。足立区の小学校の合併の例は、近隣で文化が似通っている学校同士の印象。しかし、南陽市はそれぞれが離れていて違う文化を持った学校なので、小さい方の学校の文化が切り捨てられる傾向にあるように思う。荻小学校がなくなる時に、会議に参加したが、大きい学校に統合してほしいという気持ちと地元の学校がなくなって欲しくないという気持ちの両方があった。ワラビ取りの話がさっきあったが、年に1回お客様気分に来てもらってうれしいが、切り捨てられた方の文化がなくなってしまうのかなと思った。統合でなくなった学校の箱は残る。地域の人にとっては象徴なので、再利用できないのかなと思う。改善提案シートに書くとしたらそのあたりを書きたい。

(石井コーディネーター)

何が文化で何を残していったらいいのかというのもこういう場がないとできないと思った。改善提案シートにぜひ書いていただければと思う。中学生はその時が自然で当たり前だから、文化だと思わないだろうから、卒業した後の人が何を残すか考えて行ければいい。

(学校教育課長)

統合するということは、学ぶフィールドが広がるという風に考えている。統合しなければ知らないことを知るチャンスになっている。本物に触れるという事を重要視している南陽市としては、それをチャンスとしていきたい。

(管理課長)

廃校になった学校も、避難所として残す必要があったりする。学校技能士が定期的に点検に行って日常的な修繕をしている。小滝中学校がなくなる時に、教育資料の収容施設として使おうという事になった。その他、廃校になった学校の校歌の額や校旗の保管場所として使う予定もある。

(委員自由発言)

避難場所として活用されていることは知っているが、そこに行くまでに橋を渡る必要がある。実際に大雨の際は橋を渡るのが怖いので、その手前の公民館や自宅で待機している。

(定野ナビゲーター)

自分の学校も避難所に指定されているため、先日も訓練をした。廃校後も様々な使い方があると思う。

(石井コーディネーター)

愛着のある場所がそのまま寂れて行ったりするのは、精神的にも配慮が必要だと思う。

(定野ナビゲーター)

プラスになる使い方を考えるという事だと思う。一部校舎を残して大学にしてきたという例もある。

(石井コーディネーター)

ハードとソフトの2つの問題を提起いただいた。

(委員自由意見)

みなさんの地域も思い入れも色々だが、これからの南陽市の中学校、中学生が、こうだったら嫌だとかこうなってほしいなということは、ハード面、ソフト面のメリットデメリットもある。現在の中学校をどうしていくのかというのは、この会議で決めるのは難しいのではないかと。

(石井コーディネーター)

1つの決定打を決めるのではなく、こういう方向に行くとした場合、どういう方法でよくしたらいいかというのを考える会議。先ほどの話で言うと、もし中学校が廃校になった場合、そのままにするのではなく、

別の活用方法を考えたりして、地域や個人がそのなった時に何ができるかを考える場所である。ここでは、数字やデータだけで机上で決めることができない思いの部分の話してもらいたい。

(委員自由発言)

赤湯中学出身で良かったと思っている。3クラスで、未だに同級生が何をしているか話題になったりするくらいの大きさ。おみこしをしたり、川で遊んで怒られたりもして楽しかった。失敗する場があったことがよかったと思っている。行事や合唱コンクールでうまくいかなかった時に友達との関わり方を考えたり、怒られた時の対処法を学んだことで大人になってからもしなやかに生きられるようになった。失敗できる場としての中学校が大事だなと思っている。子育て世代の同級生が、どこかでつまずいてしまっている人もいるので、子育てしている人をロングスパンで見守る仕組みが必要だなと思った。そういう土台があれば、子供が不登校になった時も行政に相談しやすいと思う。教員をしていて、最近の教育が過渡期にあると感じる。こういうふうな学びであるべきだということと、求められる学力が違うと思う。そこから零れ落ちた子供をどう支えるのか、そもそも零れ落ちてもいいのかということを考えていた。他の町の廃校の中学校をカフェ等に再利用している例も聞く。やっぱり人がいなくなって寂しいという思いが強いと思うので、人が集まれる場所になったらいいと思う。子育てに使える施設があればと思う。南陽市では冬に遊ぶところがないので、遊戯施設がいいのではないかな。

(石井コーディネーター)

次回の第4回では今回みなさんに書いていただいた内容を集計して見ていただく。また、これまでに話題に上がっていない論点についても考えてもらいたい。まず、統合になった場合にどうやって登校するか。スクールバスでは部活動では対応できなかったり、親が送る必要があったりということで格差が生まれたりといった視点。もし学校を1つにするとしたら、どこに置くか、どういう学校にするかというハードの視点。これらはまだ話ができているので考えていきたい。また、中学生をこっそり観察したりしてフィードバックしてもらえるとありがたい。

(定野ナビゲーター)

社会に出て生き抜いていける大人になって欲しいと思い、話をした。自分が考えた理想の学校は、やりたいことができる学校、やりたいことが見つかる学校。じゃあそれがどんな学校かというと、失敗が容認される学校。悪いことをして怒られることも大事だと思う。まずは、一歩踏み出して、成長を実感し二歩目を踏み出せる学校を、地域の住民と色々な文化を踏まえて作ってほしい。

(全体協議終了)